

ちどり 令和4年2月月度特別作品

七五三

ちどり

十二月上旬、妹の七五三祝をしました。晴着は、長女が産まれた時に母が買ってくれたものです。三歳の子にとどて、着物や足袋は初めてなので、着るのも大変。着てからも窮屈そうでした。でも、神社に行つて、カメラマンに遊んでもらううちに、すっかり仲がよくなりました。家に帰つてからも、晴着のまま遊んでいました。

幼子は母の晴着で七五三

白足袋を懸命に穿く女の子

冬の虹家族四人で社へと

冬空にぼつくりの鈴響くなり

祈祷されじつとしてをり龍の玉

千歳飴母にあづけて走り出す

カメラマンと公孫樹落葉で遊びをり

弟としやがんで写る七五三

七五三父に抱かれて帰りけり

暖房の部屋で晴着のまま遊び

《作品鑑賞》

暁子

娘さんご一家の寿ぎの一日を飾らない言葉で丁寧に詠まれています。その光景がしっかり読み手に伝わり、こちらまで幸せな気持ちになります。お健やかなご成長をお祈り致します。

白足袋を懸命に穿く女の子

三歳の幼子でも今日が「はれの日」だと分っているのです。うか。懸命に足袋を穿いている姿に成長を感じています。

カメラマンと公孫樹落葉で遊びをり

良い写真を撮ろうとカメラマンは幼子の相手をしてくれます。晴着にも慣れて、色鮮やかな公孫樹落葉と遊んでいる姿が目につかび、笑い声さえ聞こえてきそうに思えます。

暖房の部屋で晴着のまま遊び

帰宅後も晴着を着て遊んでいます。楽しかった一日を終わらせたくないからかもしれません。

あざみ 令和4年2月月度特別作品

木の实

あざみ

木の实図鑑によると、木の实は世界で二万種以上、実数は約二百種とあり、興味を持ちました。近くて拾う実の殻斗の違いにも驚き、木の实探しを始めました。秋空のもと、爽やかな風に吹かれて山の麓を歩いていると、思いがけず通草を見つけたり、農家の方に果物をいただいたり、農作業をしている方と話が弾むこともあります。切株に腰掛けて野の花や小鳥に話しかけたりもします。一句できれば、嬉しいことです。今は、身近を所しか歩けません。コロナ禍が収まり、遠出することを楽しみにしています。

山裾を巡りて木の实拾ひけり

カンナ燃ゆ産土神へ向かふ道

どんぐりの墓を打ちては転がりぬ

鳥の来て嘴よりこぼす実紫

大空をぐんぐん広げ鱗雲

峠道蔓をたぐれば通草三つ

谷川の風に吹かるる臭木の实

寺に生る大きな檸檬椀ぎにけり

奥つ城は木の实時雨となりけり

夕星に庭のおしろい花匂ふ

《作品鑑賞》

秋沙

あざみさんは、木の实に関心を持って里山を歩き、木の实を探しながら花を眺めたり、鳥の声に耳を傾けました。そうした中で生まれた佳句が並びました。

どんぐりの墓を打ちては転がりぬ

ご家族の命日に墓参りされた時、どんぐりが墓に落ちて転がった。驚く本人は、墓の中から「よくお参りしてくれたね、ありがとう」という声が聞こえてきたように感じられたのである。

鳥の来て嘴よりこぼす実紫

暖かな昼下がりに、切株に腰掛けていると、鳥が飛んで来て嘴から実紫の実を零しながら飛び立った。あたかも鳥があざみさんに実紫の実をプレゼントした様に。

夕星に庭のおしろい花匂ふ

星の光があたかも月のように見える薄暗い夜、庭におしろい花が芳香を漂わせている。夕星とおしろい花の取り合わせが見事である。